

## 地域の中で支え・育ち合う子育て支援を目指して —子育てサポーターの取り組みから—

### Approach to child care support in the community

五十嵐 紗 織  
Igarashi Saori

#### 抄 録

持続可能な社会を目指すために、地域力を生かした子育て支援のありようを考える必要がある。そこで、地域に根差した子育て支援の活動の一環として実施されている、サポーター養成講座参加者に対して質問紙調査を行った。様々な立場の市民が互いに支え・育ち合い、緩やかに子育て支援にかかわる取り組みとしての意義が示された。地域と子育てという現代的な課題をつなぐきっかけとして、今後の活動の拡充が期待される。

キーワード：子育て支援、地域社会、子育ての世代間リサイクル

#### 1. はじめに

子育て中の家族に対する、子育て支援の必要性と充実が叫ばれて久しい。子育て支援という言葉は、もはや日本社会の中で定着したといっても過言ではないだろう。大豆生田<sup>i</sup> (2006) は、「子育て支援とは、子育てという営みあるいは養育機能に対して、私的・社会的・公的機能が支援的にかかわることにより、安心して子どもを産み育てる環境をつくるとともに、子どもの健やかな育ちを促すことを目的とする営み」という仮の定義を示している。今日の子育て支援は、当事者のニーズに応じて様々な機関や場面で拡充しており、日々進化しているといえよう。しかしながら、現在の子育て支援制度によって、安心して子どもを生み育てることができる社会が形成されているか、と問われれば必ずしもそうとはいえないだろう。なぜなら、合計特殊出生率は依然低迷を続けているし、児童虐待などの子どもをめぐる悲しい事件は後を絶たない。もちろん、メディアを騒がすような事件は特別な例だとしても、子育ては家族の問題と、この状況に手をこまねいているわけにはいかない。

子育て支援は、全ての子どもの健やかな成長を目指すものであり、かつ、そのために子育て中の家族を支えるものである。ところが、現代の日本における子育て支援の方向性は、どこか

経済や労働といった面に比重が置かれているのではないかと疑わずにはいられない。次世代を生き抜く子どもたちの健やかな未来のための子育て支援制度の整備に期待したい。

ここで、子育ての営みについて考えてみたい。子育ての第一義的な責任は、もちろん親にある。それでも、自分の子どもを持たない一市民が、子育てと無縁だとはいうことにはならない。子育ての任は、その親だけに背負わされるものではない。子育ては、社会の営みとしてとらえる必要がある。というのも、子育ては社会全体の問題として、遠い昔から人々は出生と死去を繰り返しながら、繁栄してきたからに他ならない。鯨岡<sup>ii</sup>は(2002)、養育者と子どもとの関係を「育てる一育てられる」、という命の世代間リサイクルの関係にあると指摘している。「育てる者」である親も、以前は「育てられる者」であり、今「育てられる者」である子どもたちも、未来の「育てる者」になっていくという、大きな循環である。金田<sup>iii</sup>(2003)は、「赤ちゃんは現実態としては私たちの後輩であるが、可能態としては先輩になり得る」と述べている。親は、初めから親として存在するのではない。親は子どもの存在を通して親になっていく。子どもを育て、子どもが育つことを学ぶということは、自分自身が親や大人になっていくことを学ぶことでもある。次世代を担う子どもたちが心身ともに豊かに成長できること、またその親たちが余裕を持って子育てと向き合えるような社会や環境の整備が所望される。

そこで、注目したいのは、社会全体で子育てを支え、互いに育ち合う、地域力を生かした子育て支援である。子育てを行う社会は、いわば、持続可能性社会である必要がある。持続していかなければ、次世代を生み出すことも、いのちの循環を促していくこともできない。社会の中で子育て支援の輪を広げていくことは、今日の子育て支援のテーマの一つであるともいえる。大豆生田<sup>iv</sup>(2013)は、子育ての社会化とは社会全体で子育てをシェアすることだとし、保育の場が子どもを中心にした地域コミュニティの拠点として機能し、共に支え合い育ちあう子育て支援型社会の大きな役割を担うと述べている。地域での付き合いが薄くなったといわれる現代、地域社会の中で市民がお互いに手を携えながら成熟していく姿勢が求められている。子育て支援は、与えるものと受けるものの方向性が決まっているものではない。地域のだれもが支援者になり得るし、だれもが支援を受けることができる関係性が望ましい。社会の力が子育て支援に期待される今日、地域の中で住民が共に支え・育ち合う子育て支援について考えていきたい。

## 2. 子育てサポーター事業について

本調査を実施した長野県上田市は、菅平高原・別所温泉などの観光地を抱え「信州の鎌倉」として、その自然豊かな環境をPRしている。長野県の東部に在し、現在の人口約15万6千人、世帯数約6万2千世帯（平成26年9月現在）<sup>v</sup>である。

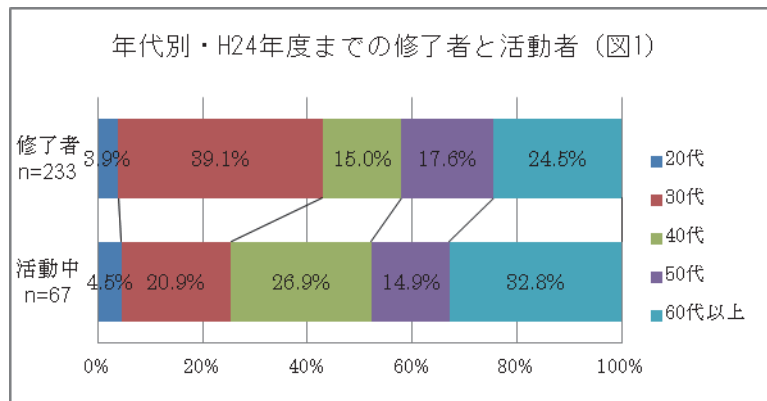
「子育てサポーター」事業は、長野県上田市で行われている取り組みである。具体的には、子育て支援センターなどにおいて、利用者の話を聞いたり、子どもの遊びの手助けをしたり、子育て中の親子に寄り添う支援を行うボランティアのことを指す。同様の取り組みを行っている他の市町村もあるが、上田市においては平成16年度から行われている、先進的かつ継続的な事業である点に着目したい。

子育てサポーターとして活動するためには、養成講座を修了する必要がある。子育て経験や性別などは不問で、子育て支援に関心のある市民であればだれでも受講することができる。子育てサポーター養成講座修了者には修了証が授与され、主に地元地域の子育て支援センター(子育て広場などを含む)で、活動する。活動は月に1回～数回程度、地域や登録サポーター数などによって調整されている。

上田市の公式ウェブサイト上では、子育てサポーターの活動について、『子育ては楽しいけれど…辛かったりしんどかったり、大変な思いをだれかにわかってほしい…。そんな母親・父親に寄り添い、子育てを地域のみんなで支えあっていきませんか。今、子育て中の方、子育てに一段落した方、子育てはしたことはないけれど子育て支援に興味のある方。性別は問いません。養成講座を通して一緒に地域子育て支援の輪を広げていきましょう。自分にできる一歩を踏み出してみませんか。』と紹介されている。まさに、地域で支える子育て支援について学び、活動する取り組みである。

それでは、これまでの子育てサポーターの受講人数の変遷や現在の活動状況について、上田市当局から提供された資料を手掛かりに、検討を加えたい。子育てサポーター養成講座は平成16年度から始まり、これまでに計233名が修了している(女性229名・男性4名)。そのうち、現在子育てサポーターとして活動しているのは67名(女性65名・男性2名)。修了者・活動者ともに女性が圧倒的に多く、修了者の3割弱が子育てサポーターとして活動に当たっている。

図1には、平成25年4月時点の、子育てサポーター養成講座修了者と、活動者の年代を示した。修了者の4割を30代が占めるが、活動者となるとその割合は半減する。代わって、40代と60代以上の活動者の割合が増える。30代の修了者の多くは子育て中と考えられ、子育て支援に関心はあっても、実際にサポーターとして活動することが難しいと推知される。活動者の約半数は50代以上のシニア世代であることから、多くのシニア世代が活躍している場といえよう。



### 3. 目的

本研究では、子育てサポーター養成講座修了者への調査を手掛かりに、地域において人と人をつなぐ子育て支援に関する意識を把握し、その意義と課題を明らかにすることを目的とする。

これまでも、子育て支援にかかわる地域ボランティア活動の報告は、多くの研究者によっ

て行われている。桑野<sup>vi</sup> (2004, pp. 107-114) は、親が自信を持って日常の子育てに生き生きと取り組めるように地域で温かく支援することが、子育て支援の基本であると述べており、子育て支援センターでのボランティア活動の事例を紹介している。また、中山<sup>vii</sup> (2000, pp. 784-785) は、子育て支援にかかわるボランティアの養成は急務であり、子育ての当事者でない人々を巻き込みながら子育てを社会化するといった面からも効果が期待されるとする。清水<sup>viii</sup> (2006, pp. 115-124) は、シニア世代による子育て支援の実践を取り上げ、シニア世代が「地域の祖父母」としてそのパワーを生かす可能性に言及している。中村<sup>ix</sup> (2005, pp. 105-118) は地域の人々が子育て中の親をサポートする重要性とともに、複数の児童福祉の専門機関が地域住民に子育てに関連する学習の機会を提供する必要性を訴える。多くの先行研究の中でも、入江・菅原<sup>x</sup> (2012, pp. 40-50) は、地域における子育てサポーター養成講座に注目して調査を行っているという点で非常に参考になる。このように、地域住民と子育て支援施設でのボランティア活動に関する調査・研究は、すでに数多くなされている。

しかしながら、子育て中の当事者と当事者でない地域住民が、互いに支え合い育ち合うといった視点から子育てサポーターの取り組みについて検討を加えた研究は、管見の限りほとんど見当たらなかった。そこで、本研究では子育てサポーター養成講座修了者の意識を明らかにすることで、地域の様々な人が子育てにかかわり、ともに支え・育ち合う子育て支援の在り方についてわずかながらも知見を得たい。

## 4. 方法

### (1) 調査の概要

本稿で扱うデータは、平成25年度子育てサポーター養成講座を受講した市民を対象に実施した質問紙調査から得られたものである。質問紙調査に先立ち、予備調査として当局担当者に調査内容を確認してもらい、内容の再検討を行った。そこで、子育てサポーター養成講座の受講を目的としている参加者も少なくないという助言を受けた。受講のみ希望している修了者が気分を害することがないように配慮し、内容を一部修正し調査に臨んだ。

調査対象は、平成25年度に長野県上田市子育てサポーター養成講座修了式に出席した27名。調査日は、平成25年7月18日。無記名自記入式の質問紙を子育てサポーター養成講座修了式後に配布し、回収した。回収数27枚（回収率100%）。本調査の依頼書には、この調査は上田市の事業とは関連のない任意の調査であることを記載し、研究の目的と趣旨についての理解を得た。なお、都合で当日欠席した修了者もいることを付記しておく。

### (2) 調査項目

調査項目は、次の8項目である。

- ・属性（性別、年代、家族状況、現在子どもと接する状況、上田市在住期間）
- ・子育てサポーターと話した経験
- ・どのようにして子育てサポーター養成講座の事を知ったか

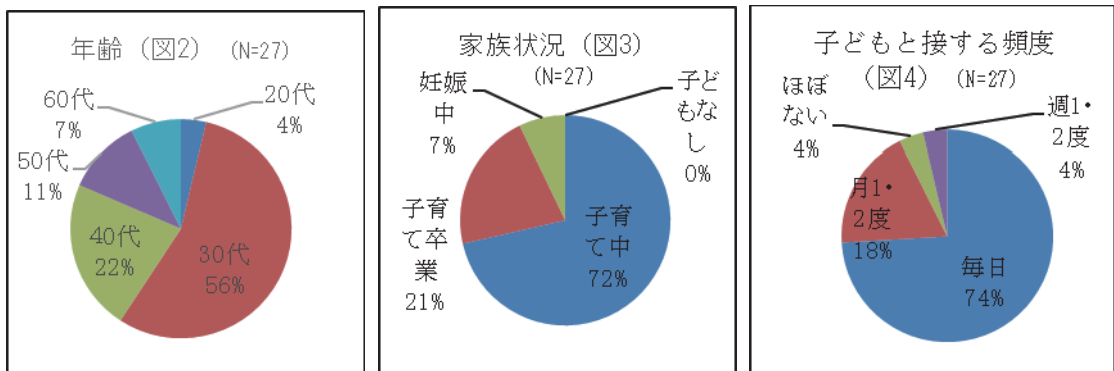
- ・子育てサポーター養成講座の申し込み動機
- ・今後、子育てサポーターとして活動するか否か
- ・子育てサポーターとして目指す姿、目標（自由記述）
- ・子育てサポーターとして活動しない理由（活動予定がない人のみ）
- ・子育て支援全般に関する考え（自由記述）

## 5. 結果と考察

### (1) 質問紙対象者の属性

質問紙対象者の属性を簡単にみていく。対象者は、27名全てが女性だった。年齢は、20代が3.7%、30代が55.6%、40代22.2%、50代が11.1%、60代が7.4%だった（図2）。現在の家族状況（複数回答）は、子育て中が71.4%、子育て卒業が21.4%、妊娠中が7.1%で、子どもなしはいなかった（図3）。おおむね18歳未満の子どもと接する頻度は、毎日が74.7%、月1・2度が18.5%、週1・2度が3.7%、ほばないが3.7%だった（図4）。上田市在住期間は、最短1.5年、最長62年。平均21.4年であった。

すなわち、平成25年度の子育てサポーター養成講座の修了者の約7割は、子育て中の20～40代の女性であるといえる。また50代・60代の修了者は約18%、家庭状況の「子育て卒業」21%という結果から、全体の約2割が自分の子育てが一段落した、シニア世代であるといえる。



### (2) 子育てサポーター養成講座に申し込んだ経緯

今回の子育てサポーター養成講座に申し込む以前に、現役の子育てサポーターと実際に話をしたことがあるかという問いに関しては、「ある」と回答した修了者は30.8%で、具体的な場所としては各支援センターや幼稚園などが挙げられた。一方、「なし」と回答した修了者は69.2%にのぼった。

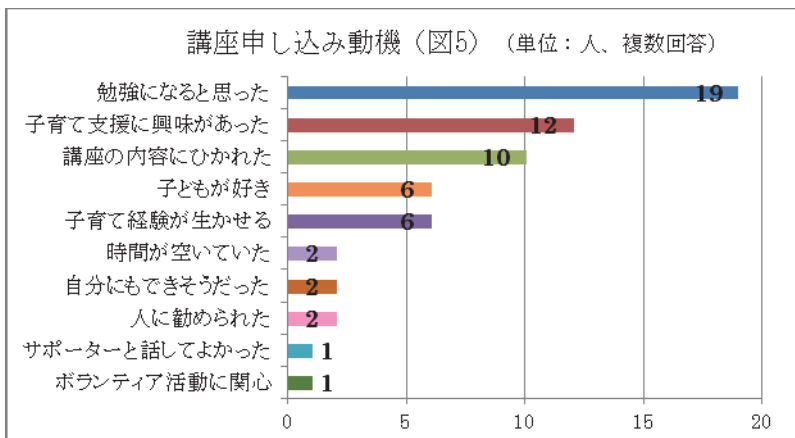
子育てサポーター養成講座のことをどのような方法で知ったか尋ねたところ、市の広報で知ったが71.4%と最も多く、次いで支援センターなどの職員からが25.0%、現役の子育てサポーターから聞いたが3.6%だった。つまり、子育てサポーター活動が、まだ市民に十分に浸透しているとはいえない状況にあり、この講座が開講されることを広報で知ったという回答者が多数

だったといえよう。

### (3) 子育てサポーター養成講座に申し込んだ動機 (図5)

図5には、子育てサポーター養成講座の申し込み動機を示した(複数回答)。勉強になると思ったと答えた回答者が最も多く、次いで子育て支援に興味があった、講座の内容にひかれたという回答者が多かった。その他の自由記述欄には、「人のため、社会のためにやくにたてばと思った」「今の子育てを知りたかった」などが挙げられた。

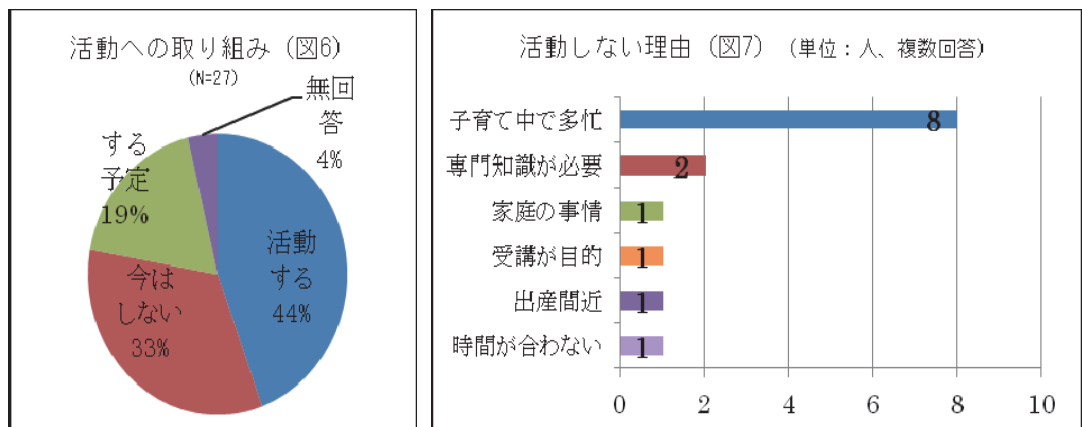
子育てサポーターとして活動することだけでなく、勉強になる・講座の内容にひかれたという回答者が多かったことから、幅広い世代の市民に受け入れられる魅力的な講座内容であるといえよう。つまり、市民の要望を的確に取り入れた市民講座だということができ、今後も受講者



が増えていくことが期待される。加えて、回答者の全てが子どもを持つ母親である(妊娠中も含む)ことから、子育て支援に関心が高く、子育て経験が生かせる活動という点にも賛同が集まったと考えられる。

### (4) 子育てサポーターとしての今後の活動予定 (図6) (図7)

この問いに対しては、活動する・活動予定との回答者が大半を占めた。詳細を見ていくと、活動するが44.4%、活動予定18.52%だった。一方、今はしないが33.3%、無回答が3.7% (1名) という結果になった。ちなみに、活動するつもりのない回答者はいなかった。



今はしないと回答した修了者に、その理由を尋ねた(複数回答)(図7)。すると、子育て中で

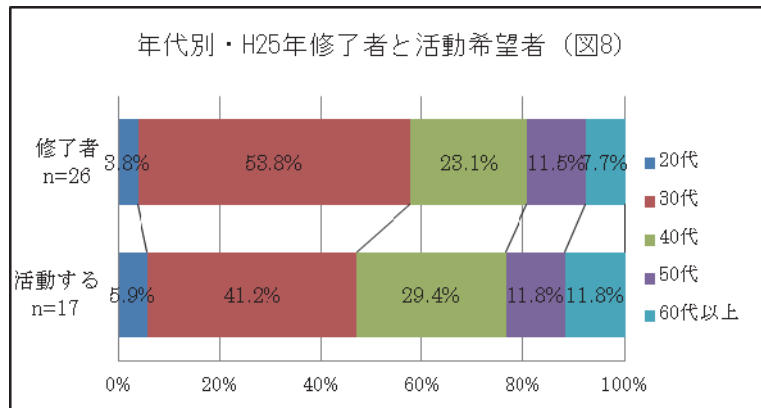
忙しいという理由が最も多かった。子育てサポーター活動は、主に未就園児を対象とした施設での活動であるため、自分の子どもと一緒に活動することも十分可能である。しかしながら、上の子どもの送り迎えや家事などが忙しく、今は活動しないと答えた回答者が多いと考えられる。また、子育て支援にかかわることが不安、自分にはできないと思ったという選択肢を選んだ回答者はおらず、家庭状況や時間などの条件が整えば、子育てサポーター活動に携わりたいと考えているといえよう。

くわえて、上田市では、サポーターの不安解消と新たな知識の吸収のために、スキルアップ講座を実施している。つまり、安心してサポーター活動に臨むために、必要な知識を身につける機会がある。たとえば、平成25年には乳幼児の予防接種と離乳食に関するスキルアップ講座が、サポーターからの要望で開かれた。加えて、サポーター間での連絡調整、交流の時間も用意されている。このような取り組みにより、子育て支援に対する興味関心が増し、サポーター活動への参加につながるのではないかと推察される。

#### (5) 他の項目との関連性

次に、他の質問項目との間にどのような関連性があるかみていきたい。

図8には、子育てサポーター養成講座修了者と、活動希望者の比較を示した。実際に活動を希望する割合が減少しているのは、30代のみである。前述の通り、30代の修了者が全員子育て中であることが関連していると考えられる。



前出の図1と比較すると、今回は特に30代の修了者の割合が多く、50代以上の割合が少なかった。活動希望者に占める50代以上の割合が約25%に留まったことから、今回の子育てサポーター養成講座を修了し、今後活動に加わる新メンバーは、40代以下の世代の割合が高くなった。

子育て中・子育て卒業の家庭状況と、本講座の申し込み動機の各項目に関して直接確率計算をしたところ、有意な差は見られなかった。同様に、家庭状況と子育てサポーター活動の有無（活動する：子育て中11名、子育て卒業5名）、（活動しない：子育て中8名、子育て卒業1名）の間にも有意な差は認められなかった。よって、子育て中や子育て卒業といった家庭状況と、講座の申し込み動機や子育てサポーターとしての活動の有無については関連があるとはいえず、それぞれの事情によるものが大きいと考えられる。

一方、サポーター活動をするか否かと、申し込み動機「勉強になったと思った」との項目については、偶然確率  $p=0.0233$ （両側検定）であり、有意水準5%で有意だった。つまり、サポー

ター活動をしない修了者の多くが、自身の勉強のために本講座を受講したといえる。

## (6) 自由記述から

最後に、「子育てサポーターとしてどのような活動がしたいか」、「現代の子育て支援についてどう思うか」の2点について、自由に考えを述べてもらった。回答者それぞれの考えや意識を如実に感じ取ることができ、非常に興味深い資料である。紙幅の関係上すべてを紹介できないことは非常に残念であるが、その一部を載せ検討を加えたい。なお、文章は回答者から得られたまま加筆修正していない。

### ①子育てサポーターとしてどのような活動がしたいか。

「役立てたらうれしい。」「上田に来て20年、子育て中に大変お世話になった感謝の気持ちです。」「とにかく相手の話をじっくりと聴けるようにすること。必要な時は正確な情報を提供できるように常に学習していること。ゆったり、ゆっくり自然な形で寄り添えたらいいと思います。」「講座で学んだことをいかし、また子育て中のお母さんの悩みなどを聞くことができ、役に立てればと思います。」無理ない範囲の活動を通して、子育て中の親子の役に立ちたいという前向きな意見がみられた。

「サポーター養成講座で学んだことや今までの自分の子育て経験等をいかして、かつ慎重に接していきたいと思う。」「自分の経験を生かして親子に寄り添えるようになりたいと思う。」これまで、自分自身が積み重ねてきた子育てに関する経験を生かして、活動に取り組みたいと考えているといえる。

「“お母さん”の一人として、相談などしたりされたり出来たらいいと思っています。」「母親がサポーターと話すことで、心が少しでも楽になって帰れるような関わりを心がけたいです。」自分自身も一人の母親として、同じ目線に立って利用者の話を聞いたり、利用者の気持ちに寄り添いたいという子育て中の家族に対する優しさがうかがえる。

「自分もリフレッシュしながらやって行きたいです。」「孫が生まれ、昔の子育てではなく今現在の子育てを自分なりにふれて行きたい。無理のない範囲の活動をしたい。」子育てを卒業した世代の回答者からは、孫育てに関わる為に、現代の子育てについての知識を得たいと考えていることが感じられた。同様に、自己を犠牲にしたり無理をしたりするのではなく、この活動を通して自分自身の生活にプラスになることを期待する様子がみられた。

「子育て経験を生かし、お母さんたちの交流のかけはしとなれるよう、自分も交流を楽しみながら、地域にも貢献できたらと思う。」「自分の子育て時代とは異なることが多いのですが、基本姿勢は全く同じだと思います。一人一人大切な人間、親が大切に育てている宝物であることを思い、子育てのサポートをしていく。」この2名の記述は、子育てサポーター養成講座の趣旨を非常に深く理解し、活動に対する熱意が表われる内容である。このように、地域における子育て支援のあり方に関心の高い子育てサポーターの活躍によって、活動の輪がより一層広がっていくのではないかと考えられる。さらに、活動前にもかかわらず継続した活動を希望す



る意見もあり、活動の持続性が期待できる。

## ②現代の子育て支援に関してどう思うか。

「子育てサポーターの役割存在が広く浸透するようになれば、もっと利用者と適切な距離が測れるのかなと思います。」「支援者は、利用者がいずれ地域に戻り、近くにいる人達とコミュニケーションをとり生活していけるよう、支援ができるとよいと思っています。」「子どもと向き合うだけの日々から、世界を広げるきっかけになりうると思います。」「こどもに寄り添うだけではなく、子育て中の母親にも寄り添う支援という感じが良いと思った。母親がゆとりがあったり心が穏やかであると、こどもが笑顔でいることが多く、のびのびしていると感じる。(自分のこどもの事です)。」子育てサポーター制度については、市民への認知が十分でないとの指摘があり、地域で活躍できる支援者を目指したいという意見が挙がった。また、子育て中の親子にゆるやかに寄り添い、親が余裕を持って子育てできるように支援するという子育てサポーターの活動に賛同していることが推察される。

「30年前のは子育て母と子の単位だったけれど、集団での支援をして将来の子どもたちのためにする事業はどんどんすべきで、地域のサポートは大切なこと。」「今の世の中子育て支援が大事だと思います。子どもが安心して遊べる所がある今の時代すごくよいですね。」「子育て支援をしていかなければいけないという理由は数々あると思いますが、基本は家族というか親の姿勢だと思う。心豊かに親子が接する時間を確保してあげたい。」主に、シニア世代の修了者からは子育て支援の充実に関する意見が挙がった。特に地域ぐるみで子育て中の親子に対する支援をしていくことが必要である。

「親も子どももいきいきと育児ができる環境が提供されていて、子育て中の親にはとてもありがたいです。」「とても大切な事だと思います。(支援が)あるだけで安心する事が出来ると思う。」修了者には現役子育て世代も多く、利用者としての意見や指摘もみられた。

「子育て支援を積極的に利用している方もいる一方で、事業を知らなかったり、利用したくないという方もいる。強制ではないものだけど、利用していない方も子育て中の困り感は多少は持っていると思うので、支援センターや支援を利用していない方への支援に、何か良い方法はないのかなと思いました。」子育てサポーター活動では支援することが難しい、積極的に子育て支援を利用していない子育て家族に対して、何か支援する手立てはないかという、非常に細やかな視点からの意見もあった。

自由記述から得られた意見について、若干の考察を加えたい。子育てサポーター活動への展望に関する意見からは、自分自身が子育てを通して支えられた経験や、母親としての目線を活かして子育て家族に寄り添いたいと考えている様子が汲みとれた。また、地域で活動する子育てサポーターという取り組みに、非常に共感を持っていることもわかった。子育てサポーター活動は、子育て家族の支援とともに、自分もだれかの役に立つことができる、地域のために役立てるといった自己肯定感が得られる活動ともいえる。

子育て支援草創期には珍しくなかった、与えられるだけの子育て支援の時代は終わりを迎えようとしている。自分のできる能力は生かし、支援を受けるときは受けるといった姿が、これからの子育て支援にはさらに必要となってくるといえよう。地域の中で、互いに助け合ったり支え合ったり、理解し合うという方向性が、子育て支援の幅をさらに広げ、子どもの豊かな成長を手助けし、また子育て中の保護者が子育てをより楽しむ余裕ができるような方向へと、進めていくことができるのではないだろうか。

## 6. おわりに

最後に、甚だ稚拙ではあるが若干の総合考察を加えたい。まず、本研究を通して示唆された、子育てサポーター活動の取り組みに関する意義と課題を取り上げる。

上田市における子育てサポーターの取り組みが最も秀逸であるのは、地域のだれもが子育て中の家族を支え・育ち合うことができる支援に参画できるという点である。これまで、地域での子育て支援の担い手のほとんどは、50・60代の女性だった（入江ら2012）。確かに、生活や時間に余裕ができた人生の先輩方には、自分の子育て経験を活かし、その力を大いに発揮してほしい場でもある。しかし、それは同時に、一方通行の子育て支援に陥ってしまう危険もはらんでいる。その点、本子育てサポーターの活動者の約半数が20～40代の子育て現役世代であることは、注目に値する。自分ができる範囲で、支えたり支えてもらったりという相互の関係性が構築されているといえる。

加えて、「受講のみを希望」する市民も歓迎していることも、優れた面といえよう。サポーター活動を強制せず、自分ができる範囲で、ゆるやかに子育て支援にかかわっていくという事業の主旨に賛同を得ているからこそ、毎年多くの受講者が集まっているともいえる。家庭の事情などですぐにサポーターとして活動できなくても、サポーターの心構えと知識を身につけた準サポーターとしての存在意義は小さくない。次世代の子育て支援の担い手として、活躍が期待される。

筆者は、子育てサポーター活動は、子育て支援に関するボランティアのファーストステップと位置づけたい。というのも、子育てサポーター活動で得た知識や技術を基に、主体的に子育て支援の活動の場を広げていく可能性が期待できるからである。無理のない範囲で、「自分でもできそう」と思える子育てサポーターとしての活動が、子育て支援のきっかけとなり、次第にその根を深く豊かにし、枝葉を十分に伸ばしていくような活動となることを願う。

今後の課題としては、第一に子育てサポーター活動の市民への周知である。調査結果からも明らかなように、子育てサポーター養成講座を受講するまでその存在を知らず、活動中のサポーターと話したことがない修了者が7割近くにのぼった。子育てサポーター養成講座に申し込みをするという子育て支援に関心の高いと思われる市民でも、受講以前は子育てサポーター活動についてほとんど知らなかったといえる。子育てサポーターの認知が高くなれば、活動がしやすくなることが予想されるし、現在よりもその活躍の幅が広がることも期待できる。子育てサポーターの活動を広く市民に浸透させていく為に、更なる広報活動が欠かせないだろう。

第二に、子育てサポーター養成講座の安定した受講者数の確保である。子育てサポーターとしての活動を目指す市民だけでなく、より多くの市民に地域ぐるみの子育て支援について理解してもらう為にも、その内容を一層充実させ、毎年を受講者数を増やしていくことが大切である。現在は平日の午前中のみを実施されている子育てサポーター養成講座だが、同じ内容の講座を日時を変えて数回実施することや、土曜日にも開講するなどの工夫が必要だと考えられる。

第三に、スキルアップ講座の更なる充実を挙げたい。年数回行われているスキルアップ講座では、子育て支援の実情にあった講座が行われている。活動中の子育てサポーターからの要望が大きかった内容をスキルアップ講座で取り上げている点は、非常に評価できる。今後は、スキルアップ講座に参加できなかった修了者に対しても、同内容の講座を複数回開催することや、インターネットを通じた動画の提供等、学習できる環境が提供されることを望む。

第四に、サポーター連絡会議のありかたについても工夫が求められよう。継続的な活動ができるように、問題を共有したり、悩みを相談したり、支援の方法をアドバイスしあったりといった、子育てサポーター同士の支え合い・育ち合いを目指した取り組みを考えていく必要がある。

最後に、利用者からの意見を子育てサポーター活動に反映させる機会の必要性である。利用者の意見を聞く機会（直接的・間接的を問わず）があれば、子育てサポーターの支援がより子育て家族に寄り添ったものになることが期待できる。実際に子育て支援施設を利用する保護者からの意見を活かすことができれば、サポーター活動の励みにもなり、サポーター自身の成長を促すようなアプローチにもなると考えられる。

子育ては、だれからも認められることもなく褒められることもなく、日々繰り返される、終わりの見えない務めだともいえる。そんな時、子育て支援施設に出かけて行けば、だれかに会えて、密閉された親子の空間から親も子どもも解放される。自由な時間の中で、ゆっくりと気の赴くまま、子どもと向き合うことができる。そして、地域の仲間としての子育てサポーターと出会うことができる。子育てサポーターには、ゆったりとして温かく、心地よい存在として、活躍できる場が提供されている。子育ての経験を自分の財産として次世代に受け継いでいくことも大切だが、だからといって子育て経験がないものが子育て支援に携われないことはない。だれもが子育て支援者の一人となることができる。そこに、子育てサポーターの意義があると感じている。

地域社会が希薄化しているといわれる現代において、ボランティアの力を得た地域での子育て支援のあり方を探り、その意義と可能性を見出す研究の一端を担うことができたという面で、わずかながらもこの研究の意義があるのではないだろうか。一方、本研究では十分に踏み込んで検討することができなかった、子育て中の家族は子育てサポーターの支援についてどのように認識しているか、子育てサポーター自身が地域社会での子育て支援についてどのように感じているかといった調査・研究については、別の機会に譲りたい。

子育てサポーターの存在は、何かしらの進行を“促進する”ファシリテーターではなく、さまざまな人や思いを“つなぐ・かかわる”コーディネーターとしての役割が期待される。今後、この取り組みの発展と共に、地域で支え・育ち合う子育て支援がより一層充実していくことを

願わずにはいられない。

最後に、本調査に心よく協力してくださった子育てサポーター養成講座を修了された皆様、及び当局ご担当者の方々に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

## 注

- <sup>i</sup> 大豆生田啓友（2006）『支え合い、育ち合いの子育て支援 保育所・幼稚園・ひろば型支援施設における子育て支援実践論』 関東学院大学出版会 p. 43
- <sup>ii</sup> 鯨岡峻（2002）『〈育てられる者〉から〈育てる者〉へ』 日本放送出版協会 p. 82
- <sup>iii</sup> 金田利子（2003）『育てられている時代に育てることを学ぶ』 新読書社 p. 5
- <sup>iv</sup> 大豆生田啓友（2013）『保育の場における子育て支援の課題』 保育学研究 第51巻第1号 pp. 134－142
- <sup>v</sup> 上田市公式ウェブサイト <http://www.city.ueda.nagano.jp/hp/index.html>
- <sup>vi</sup> 桑野嘉津子（2004）『「親としての自信」を支援するために ―宗像市子育て支援センターの活動から―』 日本生活体験学習学会誌 第4号 pp. 107－114
- <sup>vii</sup> 中山美知子・太田光洋（2000）『子育て支援活動におけるボランティア ―地域子育て支援の内容と方法Ⅲ―』 日本保育学会第53回大会発表論文集 pp. 784－785
- <sup>viii</sup> 清水美知子（2006）『シニア世代による子育て支援の実践～加古川市「にこにこオープンルーム」を事例として～』 関西国際大学研究紀要 第7号 pp. 115－124
- <sup>ix</sup> 中村真弓（2005）『地域における育児ネットワークに関する研究』 九州大学大学院教育学コース院生論文集 第5号 pp. 105－118
- <sup>x</sup> 入江詩子・菅原良子（2012）『地域における子育て支援ボランティア養成の課題 ～諫早市子育てサポーター養成講座受講生アンケートから～』 長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所紀要 10巻1号 pp. 40－50

## 参考文献

無藤隆・安藤智子編 （2008） 『子育て支援の心理学 家庭・園・地域で育てる』 有斐閣